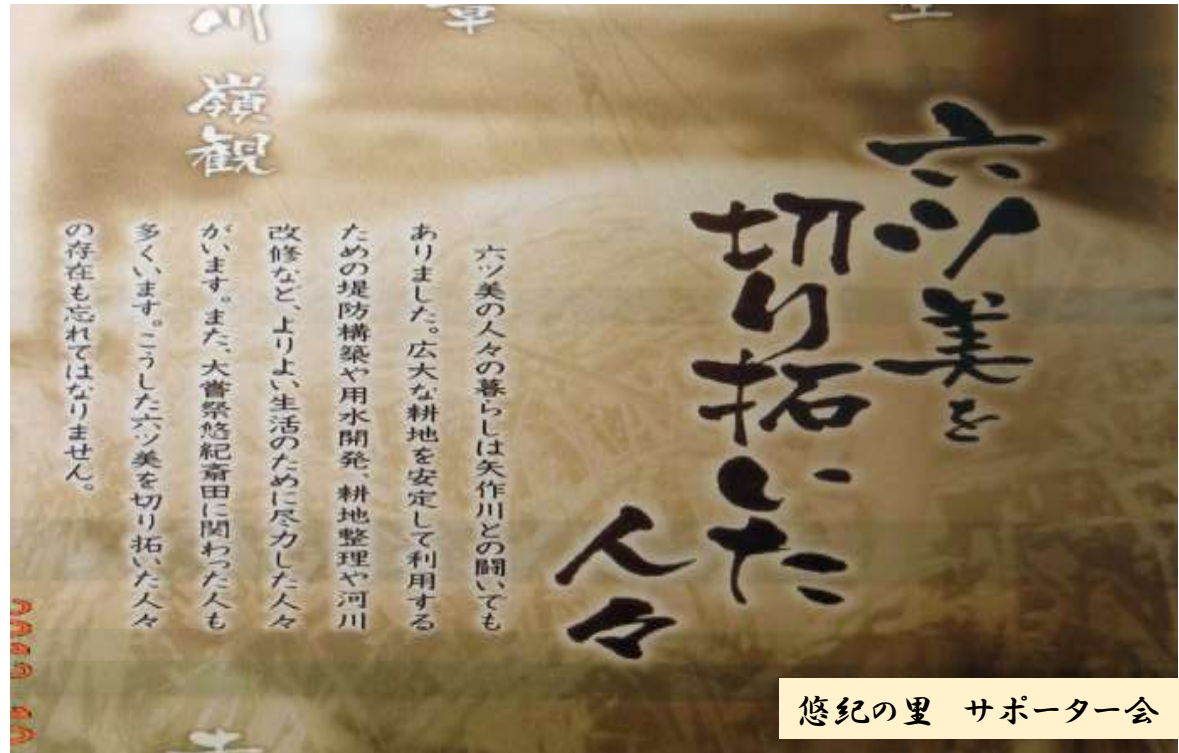


# 六ッ美を切り拓いた人々

引用文献・六ッ美風土記、私達のふるさと中之郷、ふるさと六ッ美西部、六ッ美村誌  
六ッ美南部の歴史・文化を紐解く わたしたちのふるさと六南114選等  
六ッ美の歴史を学ぶ会 高須亮平氏 横山 茂氏講演資料

揭示資料以外で  
中世から江戸時代にかけて  
活躍した人々を追加記載



悠紀の里 サポーター会

# 明治・大正時代に活躍した人物

- ・活躍した内容

用水開発・農地整理 悠紀斎田 軽便鉄道 六ッ美村の行政・教育

- ・主な人物名

早川龍介 鍋田恒雄 鶴田勝蔵 早川治三郎 杉浦定吉  
早川定之助 山崎延吉 野々山卯三郎 杉浦藤助

# 中世・江戸初期に活躍した人物

- ・徳川家康の三河地方制圧から、江戸幕府の創立、幕府の初期の行政等に活躍・貢献した人物

本多作左衛門重次 石川数正 大久保忠俊 本多正信

大久保彦左衛門忠教

土井利勝 板倉勝重 板倉重矩

- ・占部用水開発

野本新十郎(正名)・渡辺弥蔵(国正)

# 早川龍介 (1853-1933)

衆議院議員 中島耕地整理 悠紀齋田 ゆきさいでん

- いせのかみ 小笠原伊勢守の代官の家に生まれ、明治の世になると27歳で県会議員となり、県議会副議長も務めた
- 明治23年(1890)に37才で、第1回帝国議会の選挙において衆議院議員に選ばれ、大正9年(1920)まで、10回の当選をした 1.2.4.6.7.8.9.11.12.14回
- 総理大臣を務めた伊藤博文、やまがた山縣有朋、農商務大臣を務めた金子賢太郎、こうすけ曾根荒助などと精通しており、中央政府とのつながりが大きかったと言われる
- 明治33年に耕地整理法が公布され、耕地整理の奨励に取り組み、翌年中島の「耕地整理」につなげた。
- 明治41年から44年に「高橋用水の大改修」を主導し、かんがい灌漑面積が大幅に拡大
- 「耕地整理」、「高橋用水の改修」は、「悠紀齋田」選定の要件の中で重要な項目を満たすことに寄与した
- 大正4年(1915)の悠紀齋田諸儀式・稻田の管理等において、衆議院議員でありながら、村人の希望で六ツ美村村長を兼務し、主宰した
- 大正4年に六ツ美農業補修学校を創設、夜学から昼間に通学は六ツ美の全地域から菜種の研究をし菜種の全国的生産地へ（昭和4年に高松宮殿下が視察）
- 昭和8年、81才で逝去（漢詩、俳句、三味線、踊り等多趣味の人物）

## 鍋田恒雄(1848-1931)

六ッ美村初代村長

耕地整理・西尾軽便鉄道の推進

- 明治19年(1886)から36年まで長期に渡り  
県会議員を務めた
- 明治39年(1906) 六ッ美村の初代村長
- 耕地整理の推進・・・下中島耕地整理組合  
を設立し、事業許可申請  
明治34年に起工、37年に竣工  
委員長 早川龍介 副委員 鍋田恒雄、  
鶴田勝蔵 事務長 早川治三郎
- 高橋用水の整備にも尽力した
- 農業を中心とした産業振興の実施  
田の馬耕技術、養蚕の伝習所を設置等
- 明治43年(1910)西尾軌道株式会社が  
設立されると、六ッ美から鶴田勝蔵と共に  
参加し出資した。  
その結果、翌年、西尾駅と岡崎新駅との  
間、13.3kmの鉄道が開通した。  
(西尾軽便鉄道)

## 鶴田勝蔵(1843-1910)

耕地整理・西尾軽便鉄道の推進

- 文久元年(1860)に庄屋となり、以後村政に  
40余年、生産の向上等に尽くした
- 従事する藍作と養蚕の発達を図り、貧困者  
などを救うために金品を援助した
- 杉浦定吉と協力して安藤川の改修、悪水  
整備事業に奔走し「二毛作のできる水田」  
へ整備した  
これにより、米と麦、米と菜種が収穫できる  
ようになった
- 鍋田恒雄等と共に耕地整理を推進
- 西尾軽便鉄道の設立にも貢献  
軽便鉄道の開通前、明治43年7月に没す。  
(享年68才)

# 杉浦定吉 (1854-1910)

## 安藤川の改修

- 明治時代、安藤地区は沼や水はけの悪い土地であった
- 安藤川の第2期改修に活躍 明治33年(1900)3月着工-明治34年(1901)3月竣工  
工事は、水路を改修し、その川幅を広げ、排水を大幅に改善した

水路の長さ 本線約7km  
赤渋支線約4.2km 宮地支線約4.5km

不毛の地が、良田となり、村は潤った

[第1期改修は、明治15年の矢作川の三島切れの後の改修] (殿橋の下流)

# 早川治三郎(1864-1924)

## 耕地整理・悠紀斎田

- 耕地整理推進時の事務長
- 委員長早川龍介の元で、18年間献身的に働く[中島八幡社に顕彰碑があり]
- 悠紀斎田の諸儀式の内容等をまとめた「中島案内」の編集に参画

## 早川定之助(1866-1935)

悠紀齋田所有者 齋田管理

- 悠紀齋田の田の所有者
- 納穀示達式(のうこくしだつしき)に村長早川龍介他関係者数名と共に出席
- 齋田に入るときは、身を清め、礼服又は作業着に着替えて、齋田通用門でお祓いを受けて作業をしたが、早川定之助は、特に晒(さらし)の浄衣(じょうえ)・・・神官が神事の時着る白い清潔な衣服・・・を着て、烏帽子(えぼし)を被り、見回り・管理を行った
- 翌年、愛知県庁において、天皇家からの「紋付(菊の紋付)の銀杯一組」、「御下賜金(ごかしきん)」が伝達された
- 下中島村村長、助役、収入役、郡会議員を歴任
- 村農会役員、県農会農事奨励員を歴任

## 山崎延吉(1873-1954) のぶきち

悠紀齋田 農業技術指導

- 悠紀齋田管理・運営時の農業技術指導の最高責任者(技師農事試験場長)
- 悠紀齋田御田植歌の歌詞の創作(三人の一人)
- 教育者として日本全国を講演した。1908年から1934年までには6000回以上の講演  
農業の多角化を日本全国に広めた
- 日本の農政家・教育者、衆議院議員(1期)
- 貴族院勅選議員。(ちよくせんぎいん:優れた学識者)
- 愛知県立安城農林学校初代校長

## 杉浦藤助(1851-1925)

杉浦製糸の創始者  
悠紀齋田奉賛会・接待部委員

- 嘉永4年(1851) 生まれる
- 明治31年に杉浦製糸所を創る
- 明治の終わりは、従業員の数200人を超え、昭和時代には500名ほどになり、県下で1,2を競う程の大工場となる
- 中島の町も活気を帯び商店、旅館、料理店等が多くできた
- 中島の耕地整理に参画
- 村会議員
- 悠紀齋田奉賛会の接待部委員
- 大正14年(1925)享年75歳で没す  
(崇福寺に大きなお墓があり)

## 野々山卯三郎(1866-1929)

占部村から六ッ美村誕生への橋渡し  
悠紀齋田奉賛会・接待部長

- 慶応2年(1866)正名に生れる
- 占部村において、土地地区整理委員、収入役、助役等をつとめて、32歳の若さで、占部村村長となる
- 六ッ美村誕生まで、村長を務め、碧海郡内で種々の要職を歴任すると共に、「六ッ美村誕生の橋渡し」的役割を果たした
- 耕地整理、安藤川の改修等にも貢献
- 悠紀齋田奉賛会(会長県知事)において、接待部長を任命されている  
庶務部長は早川龍介村長
- 大正6年六ッ美村農会長
- 大正7年安藤川悪水組合会議長
- 昭和4年享年64歳で没す。

# 板倉勝重(1545-1624)

永安寺に出家後還俗 京都所司代

- 父は「善明堤の戦い」で戦死した板倉好重(1561年)(中島西町に好重の石碑があり)
- 幼少時に中島 永安寺に出家 父好重らが討死したため、還俗(げんぞく)して家を継ぐ  
(僧侶が俗人に戻ること)
- 天正14(1586)年9月、徳川家康が駿府城に移ったとき駿府の町奉行、その後、小田原の地奉行、江戸の町奉行、京都の町奉行等を務める
- 慶長8年(1603)2月、家康將軍宣下のとき、伊賀守に叙任、京都所司代となった。同14年加増され、都合1万6610石
- また、若手公家と宮中女官の密通事件(猪熊事件)を契機に朝廷の監察をも行い、同17年からは、公家諸法度、勅許紫衣・諸寺入院法度の制定に参与、京都における徳川勢力の伸張の立役者となった 80才で死去

# 板倉重矩(1617-1673)

中島藩主 老中 京都所司代

- 板倉勝重は祖父、父は板倉重昌
- 島原の乱に際しては、上使となった父について島原に出陣した。1638年父が戦死し、その際の不手際を問われて同年12月まで謹慎処分
- その後、許されて深溝藩へ
- 1639年 中島へ移転。中島藩主へ
- 寛文5年(1665年)に老中となり、4代將軍徳川家綱を補佐した
- 寛文8年(1668年)京都所司代に
- 寛文10年(1670年)、再び老中職につく
- 中島藩在任中、重矩は1万石から4万石最終的に5万石になった
- 1672年中島藩は廃藩
- 寛文12年(1672年)に下野烏山へ移封された。57歳で死去



# 本多作左衛門重次(1529-1596)

「鬼作左」 三河三奉行 岡崎城代 三河武士の手本

- ・ 岡崎市 宮地町、犬頭神社の神官屋敷で生誕、家は大平町。子孫は明治維新で祖先の生地へ帰り宮地町に在住
- ・ 三河一向一揆の際は、門徒側に付くが、改宗して家康方に付いて活躍
- ・ 三河平定後、「三河三奉行」の一人に任じられ、民生をつかさどる。勇猛果敢、剛毅(ごうき)にして、実直であったので、その勤めぶりを人々は「鬼作左」と評した
- ・ 1572年の「三方ヶ原の戦い」では、武田軍に攻められ総崩れの時、家康にふりかかる敵を倒しながら城に付き、家康の命を救った。高天神の戦い、長篠の戦い、蟹江城の攻略でも活躍
- ・ 1575年の長篠の戦いの時、留守を預かる妻に宛てた「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな馬肥やせ」という手紙は簡潔、明瞭な手紙として有名
- ・ 一軍の将として武功を重ねると共に、兵糧の備蓄、新領駿河の国の政務、家康出陣中の守城役等に能力を発揮。岡崎城代の石川数正が突如として出奔し豊臣秀吉の家臣になった後、1586年 から5年間城代を務めた。家康が秀吉の要請に応じて上洛(じょうらく: 京都に入ること)の際、人質として秀吉の母「大政所」が岡崎に来た時、冷遇したという事で秀吉の咎(とがめ)を受けた
- ・ その後も、種々の場面で秀吉に対して反抗的な言動を行い、秀吉が激怒した
- ・ 家康の関東移封後、秀吉の切腹させよの命令が実行されず、旗本は江戸常駐が定めだが、上総の古井に移し旗本上位の三千石を与えて隠居させ、後、下総の取手(茨城)に移された。
- ・ 家康は、作左衛門冷遇の代償として、嫡子「成重」を福井の丸岡城主に取り立て、四万三千石を与えた

# 石川数正 (1533-1593)

三河一向一揆後の岡崎城家老から秀吉の家臣への転身

- 天文2年(1533年)、石川康正の子として三河で生まれる。
- 家康が今川義元の人質時代から近侍(きんじ)として仕え、桶狭間の戦いで今川義元が討たれて家康が独立すると、数正は今川氏の人質であった家康の嫡男信康と駿府に留め置かれていた家康の正室築山殿を取り戻した。
- 三河一向一揆が起こると、父・康正は家康を裏切ったが、数正は浄土宗に改宗して家康に尽くした。このため戦後、家康から家老に任じられた。
- 天正10年(1582)に織田信長が死去し、その後に信長の重臣であった羽柴秀吉(豊臣秀吉)が台頭すると、数正は家康の命令で秀吉との交渉を担当した。天正12年(1584)の小牧・長久手の戦いにも参加。この戦いにおいて家康に秀吉との和睦を提言した。
- 天正13年(1585)11月13日、突如として家康のもとから出奔(しゅっぽん:逃げ出して姿をくらます)し、秀吉のもとへ逃亡した。
- その後、秀吉から河内国内で8万石を与えられ、秀吉の家臣として仕えた。数正は松本に権威と実戦に備えた雄大な松本城の築城と、街道につないで流通機構のルートを掌握するための城下町の建設、天守閣の造営など政治基盤の整備に尽力した。
- 文禄2年(1593年)に死去。享年61。墓所は美合本宗寺にある。
- 長男の康長が継いだ。遺領10万石のうち、康長は8万石、次男の康勝は1万5000石、3男の康次は5000石をそれぞれ分割相続することとなった。

# 大久保彦左衛門忠教<sup>ただたか</sup> (1560-1639)

## 「江戸幕府旗本」三河物語の著者 上和田の出身

徳川家臣大久保忠俊<sup>ただかず</sup>の弟忠員<sup>ただよ</sup>の八男 岡崎市宮地町、妙国寺前の大久保氏の族党の屋敷で誕生 兄に大久保忠世<sup>ただすけ</sup>、忠佐。

- ・ 忠世、忠佐の旗下で各地を転戦・高天神の戦い、第一次上田城の戦い等で活躍
- ・ 天正18年(1590年)小田原征伐の後、知行3000石の大身の旗本に格上げされた<sup>ちきよつ</sup>
- ・ 1600年の関ヶ原の戦いでは、家康本陣で「槍奉行」を務め活躍
- ・ 1614年、甥大久保忠隣<sup>ただちか</sup>が大久保長安の謀反疑惑に連座する形で改易、彦左衛門も知行を失う、この事件の影には忠隣と本多正信・正純の確執があった
- ・ 1615年、「大阪夏の陣」では、許されて槍奉行として家康の近くに控える
- ・ 額田郡幸田郷で2000石の所領を給わる(幸田町では「彦左まつり」が毎年実施されている)
- ・ 彦左衛門は典型的な三河武士の一人であったが、武闘派の時代から吏僚派の時代<sup>りりょう</sup>に変換する中で、忸怩たる思いも強かった・特に、徳川氏譜代家臣や武功の武士に対する軽視や、批判等に対して・このような背景の中で「三河物語」を書いている 全てが真実でないと言われているが、大久保一族の活躍、徳川家の歴史、武士のあり方を書き残した
- ・ 岡崎市竜泉寺町長福寺に墓所がある
- ・ 子孫・・・旗本子孫は明治維新で各地へ散り、現在、竜泉寺町と幸田町に在住

# 土井利勝(1573-1644)

江戸幕府最初の大老 家康、秀忠、家光に仕える 幕府の最高権力者

- 天正元年(1573年)、遠江国浜松に生れた説と、岡崎市土井町に生まれた説がある。幼少時は岡崎市土井町で過ごす。
- 実父 水野信元(家康の伯父) 養父 土井利昌 (但し 家康の落胤の説等もあり)  
らくいん(私生児)
- 数え年3歳の時、初めて主君家康に対面を許され、家康より土井松次郎を名乗るよう直々に命じられる。
- 天正7年(1579)に秀忠が生まれると7歳にして子守役となる。
- 1605年、秀忠が上洛して征夷大將軍に任ぜられた時、随行して大炊頭に任官、以後秀忠の側近としての地位を固めた。大阪の陣(1615年)の後、諸大名を幕藩体制に組み込む江戸幕府の体制の礎を築くことに貢献した。
- 1623年家光が將軍の世継ぎになった時、補佐となり、1623年將軍職に就くと大老に取り立てられた。家光を助け、幕政に腕を奮った。
- 下総の国古川16万石の城主になった。
- 1635年、武家諸法度に参勤交代制を組み込む等の大改訂を行い、幕府の支配体制を確定させた
- 寛永21年(1644)享年71歳に死去
- 岡崎市中之郷町浄妙寺にある大楠は名木として岡崎市に指定されたが、これは利勝の母(玉堂院)が墓木として1605年に植えたもので樹齡400年、俗に「土井楠」といわれている。

# 大久保忠俊(1499-1581)

蟹江7本槍 一向一揆 上和田屋敷

- 明応8年(1499)生まれる。
- 宇津忠茂の長男で、忠俊の代で大久保に改姓し、以後一族は全て大久保姓となる 三河松平氏の家臣
- 松平清康, 広忠, 徳川家康の3代にわたってつかえ, 天文6年清康の叔父の松平信定に占領されていた岡崎城の奪回に働く。
- 三河の一向一揆では, 大久保一族は上和田砦を拠点とし、家康の最大の力となって、一人の離反者も出さず一揆軍と戦った。
- 鎮圧後一揆方の門徒武士、寺院等の罪を許すように働き、上和田の浄珠院で、家康と一揆軍との和睦の仲介をした
- 天正(てんしょう)9年9月死去。83歳
- 通称は新八郎 号は常源

# 本多正信(1538-1616)

三河一向一揆・一揆方 家康の側近

- 天文七年の生まれで、家康より四歳の年長
- 幼少より家康に仕えたが、三河一向一揆の時、門徒である正信は一揆方に加わった。
- 一揆敗北後、加賀国などを流浪した。おそらく一向宗門徒の知己を頼ったのであろう。
- のちに家康のもとに帰参し、姉川の合戦に参陣、表舞台に立ったのは、1598年の秀吉の死後1603年に江戸幕府を開設すると、家康の側近参謀として幕府を実際に主導
- 武勇一辺倒の武闘派と正信等の吏僚派りりょうに分かれて権力闘争が生じたが、家康の信頼は、絶大で「乱には軍謀にあづかり、治には国政を司り、君臣の間相遇のこと、水魚のごとし」と評したと伝わる関東入国後、一万石を与えられ後二万二千石
- 駿府での家康の側近「本多正純」は嫡子

# 野本新十郎・渡辺弥蔵

## 江戸時代初期に占部用水の開削

- 占部地区は、江戸時代初期に占部用水が開削されるまでは、川らしい川がなく日照りが続くと干ばつとなり住民は苦しめられた  
⇒そこで、慶長年間になり、野本新十郎(正名)と渡辺弥蔵(中村)が水路を開削し矢作川の水を4村(国正、定国、中、正名)の田に引こうと岡崎藩に願いを出した
- 矢作川より4村まで8Kmあり、莫大な経費がかかることから協議がつかず、又地元地主も土地を失うこと、水害がおきる事を恐れ反対した
- そのため、1598年、野本と渡辺は江戸へ行き幕府に願いを出した。又 沿岸の農民の多くは、水の逆流、減反することを不服としたので、計画変更・補償をしながら工事を5年間実施。幕府がこの用水の使用を認めたのは、1603年莫大な工事費、補償費等のために両氏とも土地や家屋は人手に渡り貧窮のしたうえ亡くなったこの用水路は完成し、「占部川」と称された
- 近くの永応寺では、二人の遺徳を偲ぶために毎年6月の第2日曜日に「水恩忌」が行われている占部川神社には、用水の守護神として祀られている

(思案橋は、野本新十郎と渡辺弥蔵が工事中に金銭面をふくめた多大な労苦のため工事を続行するか、夜逃げしようか等と「思案した橋」とも伝えられている)